

四天王寺と久芳夫人



電車…三重交通バス「塔
世橋」徒歩2分

車…伊勢自動車道津IC
から車で15分

7月1日号で紹介した観音寺のほかに、高虎にゆかりの寺院として挙げられるのが四天王寺である。参宮街道沿いの栄町に門を構えるこの寺の歴史は古く、創建は奈良時代以前にさかのぼる。これまで、幾度となく戦火に焼かれ衰退と再興を繰り返す歴史の中で、江戸時代にその復興に尽力したのは高虎であった。これは、高虎の正室であった久芳夫人との関わりが深い。

久芳夫人は、但馬国（現在の兵庫県北部）一色修理^{いっしきしゅり}太夫^{だゆう}の娘で、天正9（1581）年に高虎と結婚している。二人は子宝に恵まれず、夫人は高虎に側室を迎えるよう勧めるが、当初高虎はこれを承知せず、養子である丹羽長秀^{にわながひで}の子高吉^{しょうきち}に家督^{けとく}を継がせる予定であった。後年ようやく松寿夫人^{しょうじゅ}を迎え実子^{たかつぐ}高次（2代藩主）の誕生となるが、久芳夫人への誠実な心配りは変わらなかった。

津に入ってから後も、高虎は幕府の命令で各地の城の修築（天下普請）に携わった。元和2（1616）年に家康が亡くなり、その廟所^{びょうじょ}となる日光東照宮造営のころに、久芳夫人は津城で亡くなった。これを悲しんだ高虎は、四天王寺に墓所を設け、津城内で夫人が生活していた書院建物を寺に移築するなどして弔っている。その後に寺にあてた高虎の書状には供養の礼などが記され、四天王寺への寄進の内容も知ることができる。

久芳夫人のひととなりを伝える逸話は残らないが、切れ長の目元に柔らかな表情を浮かべる肖像画を見ると、高虎を支えた穏やかさと力強さがうかがえる。これは2日から県立美術館で開催する特別展覧会に高虎像とともに出品されるので、ぜひご覧いただきたい。

（「広報津」平成20年8月1日号）



四天王寺久芳夫人の墓所